

令和5年2月14日発行・発売 (毎月14日発行・発売) 第73巻 第6号 通算1058号 昭和26年10月8日 第三種郵便物認可
【特集】全国都道府県対抗駅伝 / 日本選手権室内 / 泉谷駿介 / 羽生拓矢

陸上競技

TRACK & FIELD MAGAZINE



挑戦は続く、
これからも

新谷 仁美

積水化学

★ヒューストンドキュメント
チームでつかんだ
日本歴代2位

- 箱根駅伝TOP4
新主将インタビュー
- 鈴木 芽吹 (駒澤大)
 - 湯浅 仁 (中央大)
 - 志貴 勇斗 (青山学院大)
 - 伊地知賢造 (国学院大)

チーム訪問&練習法
白鷗女子高 (神奈川県)

3 2023
MAR.
(株)ベースボール・マガジン社

だけでなく、大塚山などの試合も視野に入れて挑む。活躍に期待だ！

宮田直美さん(58歳・茨城) W60に向けて頑張るスプリンター

ピアノの奏でる音色が、ある街角から流れてくる。宮田直美さんが講師を務めている教室からのピアノ音だろうか。

宮田さんはピアノの講師の合間にマスターズ陸上に興じている。種目は短距離がメイン。マスターズ連合が発刊している記録集の2022年度版に記載されているなかで、宮田さんはW55クラスの60m 8秒29(+1.7)、100m13秒23(+1.4)ほか、立五段跳11m28の日本記録保持者として名を連ねる。

宮田さんはアジアで初めて開催された東京五輪の年の1964年10月1日に生まれ、現在は58歳。産声を上げたのは三重県だが父親の勤務で茨城県に移り、小学校から同県で過ごした。高校はつくば市の同県立竹園高へ。陸上を始めたのは高校へ入学してからで、短距離と走幅跳をしていた。

100mのベストは12秒76、走幅跳は「5m30台だったかな」。だが、陸上での成績は「茨城県では上位に入って、北関東インターハイへは行けたけど、ここまで」と、全国大会へは届かなかった。

高校卒業後、茨城大へ進み教育学部音楽学科で学ぶ。このことがピアノ講師の道へとつながった。学生のときに余暇でやったのが陸上の走幅跳。1985年の日本インカレでは「準決勝で5m78を跳んだけど、決勝では5m60だったから6位に」。

ヤマハでピアノ講師をする以前、企業勤めをしていたときに身体を痛めた。その時期に健康維持に努め、腰痛を治すためにプールに通った。

34歳頃には「健康のために何かしたい」と思っていた矢先、新聞でマスターズ陸上の大会が報じられているのを見て「面白そうだ」と思いマスターズへ入会。長い間のブランクはあったが、34歳の1999年のマスターズ記録

集によると、W35クラスの100m13秒60(-1.7)、走幅跳4m38(+1.2)で2位、6位にランクインしている。名字は旧姓・宮原のままだった。

この年、熊本市であった第20回記念・全日本マスターズ大会では、W35・100m13秒45(-0.7)で2位に食い込んだ。時は流れ41歳のW40クラスになった年には、100m13秒00(+1.2)、走幅跳4m99(+2.0)で1位にランクインした。

50歳で12秒台をマーク 「マスターズは人生の財産」

第27回全日本マスターズ大会(宮城)のW40・100mでも13秒07(+0.7)で1位。茨城チームの4走として出場した年代別4×100mRでは3位となったが、走幅跳では4m84(+0.7)でトップと2種目を制した。

宮田姓となって以後、国立競技場であった第31回全日本マスターズ大会では、45歳となりW45・60m 8秒15(-1.1)、100mは12秒88(+0.9)と13秒を切って1位。また、49歳で迎えた岩手県北上市での第18回アジア兼第35回全日本マスターズ大会では、W45クラスでは不利な年齢ではあったが三冠を達成した。

3種目制覇の内容は60m 8秒59(-3.8)、100m13秒35(+0.8)、4×100mRの日本チームの4走で51秒80だ。50歳になった年にはW50・60m 8秒18、100m12秒99、大阪の競技会で出した立五段跳11m84と3種目で日本記録をつくった。

W50クラスでは海外でも活躍した。52歳で出たオーストラリア・パースでの第22回世界マスターズ大会ではW50・100m13秒01(+1.7)の3位と日本人のうちでは最高の順位だった。同じ年齢での2017世界マスターズ室内大会でもW50・60m 8秒35で3位、60mH10秒22の4位、4×200mRの日本チーム(4走)で2分01秒71で2位と、いずれも室内日本記録で入賞した。

なお、上記のパースでの100mの準

決勝で12秒96を出したのだが、追い風3.2mで参考記録となったことを「12秒台だったのに残念でした」と振り返る。55歳になった19年のアジア・マスターズ大会では100m13秒96、200m28秒83でアジアのNo.1となった。

この年の6月、55歳になる前の54歳のときに福岡市で行われた第103回日本選手権で、オープンであったマスターズ100mのW50クラスで13秒24とトップでフィニッシュ。「オープンとはいえ、日本選手権の舞台で走ったことの感激は忘れません」「15年に50歳で100m12秒台(12秒99)を出せたことが思い出」と話す。

マスターズとはいえ練習はしんどい。だが「練習の成果が記録にはね返るし、大会のたびに親しくなった友人と会える。これらは人生の財産ですよ」と、マスターズ礼賛をしていた。

これからは「W60クラス目指して頑張ります」ときっぱり。熟年の域を過ぎようとしている年齢だが「輝く星」の前途に目を向けたい。



マスターズリレーフェスティバルでは、100mと4×100mRで二冠を果たした宮田さん。このときの体脂肪率は7.9%